高専柔道大会と関学

柔道部　上野 勝（昭和 43 年卒、物故者）

この講義では、関学柔道部の歴史を中心に、そのあと関学柔道部の特色、柔道部活動が私に与えてくれたものについて、お話をしていきたい。

1. 関学柔道部の歴史

（1）原田の森時代（明治 42（1909）～昭和 3（1928）年）

明治 42 年冬、普通部（後に中学部と改称）のボート部員が、近隣諸校の柔道部開設の動きに刺激され､冬季の体力増強のため柔道の稽古を始めたのが我が柔道部の起源である。直後の明治 43（1910）年 4 月に菱谷伊三郎先生が柔道師範に、続いて粕谷判司先生が柔道部長に就任され正式に運動部としてのスタートが切られた。

その後、大正 6（1917）年に高等学部柔道部の誕生となり、大正 9（1920）年には馬渕得三郎先生に柔道部長に就任いただいた。昭和 23（1948）年 2 月 1 日に御逝去されるまで馬渕先生には部長を続けていただき、部員から「柔道部の父」と慕われた。

（2）上ヶ原時代（昭和 4（1929）～ 昭和 20（1945）年）：黄金時代への布石

昭和 4 年、全国高等学校・専門学校（略称：高専）柔道大会に初参加し（この年に私学の参加が認められた)、中部戦（北陸、愛知、近畿、中国、四国、山陰等の地区）1 回戦において浪速高に不戦勝にて勝ちはしたが、次戦の八高には大将戦にて敗退した。

昭和 5（1930）年：柔道部歌誕生

柔道部歌

作詞　山田藤男　　作曲　高木和夫　　採譜　島　豊

（一）　紫匂う六甲の　春は弥生の花の殿
　　嗚呼月輪は浪速潟　沖の汐風吠ゆるかな
　　空行く星は若人の　燃ゆる血潮にさき立てり

（二）　旗を翳すや上ヶ原　四隣の強者鋒おさめ
　　最後の栄誉に腕撫しつ　青き畳を血に染むる
　　苦汗の涙に意気は燃え　天下の覇者と立たんかな

（三）　見よ洛陽の花霞　霞に紛う砂煙
　　蹴立てて進む武士が　苦杯をなめし暁は
　　武士道茲に華やかに　弦月光芒今千里

この年、中部戦優勝戦において、松山高に大敗した。

昭和 6（1931）年、中部戦優勝戦において、松山高に敗退し、昭和 7（1932）年、中部戦 1 回戦において、六高に敗退、昭和 8（1933）年、中部戦優勝戦において、六高に敗退、昭和 9（1934）年、中部戦優勝戦において、松山高に敗退した。

ここで全国高専柔道大会について若干の説明をさせていただく。

第 1 回は大正 3（1914）年、京都武徳殿にて京都、東京、九州、東北の四帝大で開催し、第 13 回の大正 15（1926）年、四帝大連盟が結成され、帝大柔道会と命名し全国を 3 地区に分け大会を開催、第 16 回の昭和 4（1929）年に関学高商、同志社高商、関大予科他私学の参加が承認された。中部戦のほか東部戦（関東、甲信越、東北、北海道等の地区）、西部戦（九州、山口等の地区）があり、全国戦は京都武徳殿にて、東部、西部、中部の各優勝校が全国一をかけて覇を競う。

（3）黄金時代―3 回の全国優勝（昭和 10（1935）年、13（1938）年、14（1939）年）

昭和 10 年、中部戦優勝戦で同志社高商に勝利し、そして全国戦優勝戦で山口高商に勝利した。中部戦優勝時の喜びの様子が『関西学院大学柔道部八十年史』（平成元（1989）年 11 月 23 日発行、関西学院大学柔道部 OB 会（新月会）編集）に以下のように活き活きと描写されている。

「嗚呼―我勝てり―」

思えば大会参加以来、悲憤の涙を武徳殿上に流せしこと 6 度この重なる怨念を晴らさんと血涙の猛練習に不敗の戦力を鍛えたり、今ここに宿願の中部優勝の夢を果たせば、弦月漸く光彩を放つ、この喜び、この感激を何に託して語らん、涙溢れ声つまり語るに言葉なし。

続いて、遂に勝ち取った悲願の全国戦優勝時には、同じく『関西学院大学柔道部八十年史』に、

諸先輩の中に柔道部新月会会長、清水鷹治氏以下新しくは青木貞雄まで多数、諸先生には馬渕部長、那須教授他多く現役と合わせて 70 余名は、武徳殿正面にてよろこびの記念撮影をしたあと優勝旗を先頭に隊列を組み、部歌を高唱し宿舎に向かったが、途中 2 人の男（あとで中部戦準優勝戦で対戦した岐阜薬専の選手とわかった）が優勝旗の前に来ると突然停止して「関西学院高商柔道部万歳」を三唱したので、当方も慌てて脱帽最敬礼をしてその祝福に応えた。勝者驕らず、敗者又讃えらるべし、後味のよい幸福感を味わった。

と記されている。

昭和 11（1936）年には中部戦優勝戦で、同志社高商に敗退、昭和 12（1937）年の中部戦優勝戦でも、同志社高商に敗退した。そして昭和 13（1938）年、中部戦優勝戦で同志社高商に勝利し、全国戦優勝戦で拓大予科に勝利した。

再び『関西学院大学柔道部八十年史』によると、

昭和 10 年初制覇より 3 年目、血涙の猛練習に裏づけされた必勝の信念こそ関学柔道の真髄であり、素より未曾有の災害（大会出発日の 1 週間前に発生した神戸市を中心とした大水害のこと。県警の報告では、死傷者数千名、全半壊 5 千戸以上、床上浸水 4 万 6 千戸）のハンディに揺れるほど柔な関学柔道ではない。当然の帰結として再制覇を成し遂げたのである。勝って兜の緒を締めよ、追われる立場を常に自省自戒し更に更に精進を続けよ。

と記されている。

昭和 14（1939）年、同志社高商に勝利し中部戦優勝、そして全国戦では東北学院に勝利し優勝した。破竹の勢いで連覇を達成したのである。再度『関西学院大学柔道部八十年史』を紐解くと、

> 大会連覇するために、幸い選手自身が夫々自覚を持ち、昭和 11 年の前轍を踏むまいと猛練習を重ね、夫々が夫々の役目に応じた切れ業の修得に専念する合理的な練習に終始した。昭和 10 年来、私学の台頭物凄く、又参加校参加人数多く、強さにおいても高専柔道の最高と言われた爛熟期に於いて、その頂点を極めた関学柔道の一枚岩の強靭さには一分のスキもない。

と記されている。

昭和 15（1940）年、中部戦準優勝戦において同志社高商に引き分けたが抽選負けし、昭和 16（1941）年、文部省が突然全国高専柔道大会の中止を指令した。全国高専柔道大会の中止当時の様子は哀しくも格調高く『関西学院大学柔道部八十年史』に記されている。

> 大正 3 年以来、27 年間にわたって、京都武徳殿上絢熟豪華に展開され、一幅の絵巻物となって満天下若人の心を打ちつづけてきた全国高専柔道大会も、戦争の苛烈化とともに、事実上全国的な大会としては、この全国戦を最後に消えて行き、遂に蘇ることはなかった。まことに浪漫的な哀調深き戦いの賦といえる。

（4）戦後

昭和 26（1951）年に柔道部活動が復活し、昭和 27（1952）年の第 1 回全日本学生柔道優勝大会において 1 回戦で日本大学に負ける。その後、時は流れ昭和 41（1966）年の全日本学生柔道優勝大会の準々決勝で中央大学に負けるが関学はベスト 8 の成績を収めた。昭和 43（1968）年には全日本学生柔道優勝大会の準決勝で早稲田大学に負けるも 3 位の成績をおさめた。その結果、関学はシード校となり、昭和 44（1969）年には日大に負けるもベスト 8 の成績をおさめた。

2. 関学柔道部の特色：柔道部の心

関学柔道部は「柔道部の心」というものを定め、日頃の練習の開始時に部員全員で唱和している。柔道部の心とは次の三つから成っている。

自尊自律の精神を尊重する

関学柔道部の特色である「自由な気風」「平等の精神」を盛り込む言葉である。「自尊」は他人をも等しく尊重することであり、「平等」に通じる。さらに、「自律」は大人としての自覚をもつことであり、皆を大人として「平等」に扱うことに繋がる。それが「自由な気風」を醸し出す。

文武両道の伝統を承継する

課外活動が学生として課された学業に優先するというような本末転倒はない。文事と武事は両者を兼ね備えることが重要であり、これは柔道部の伝統であり継承すべきことである。

正々堂々たる柔道を目指す

これは技術論とは異なり態度や精神を意味する。しかしながら、勝つための技術、団体戦における勝てない相手に対する引き分けの技術と相矛盾するものではない。日頃の鍛錬の成果を遺憾なく発揮する態度を言う。いやしくも反則負けとなるような柔道は論外である。正々堂々たる柔道は自尊自律の精神、文武両道の伝統から生まれるものである。

3. 柔道部活動が私に与えてくれたもの

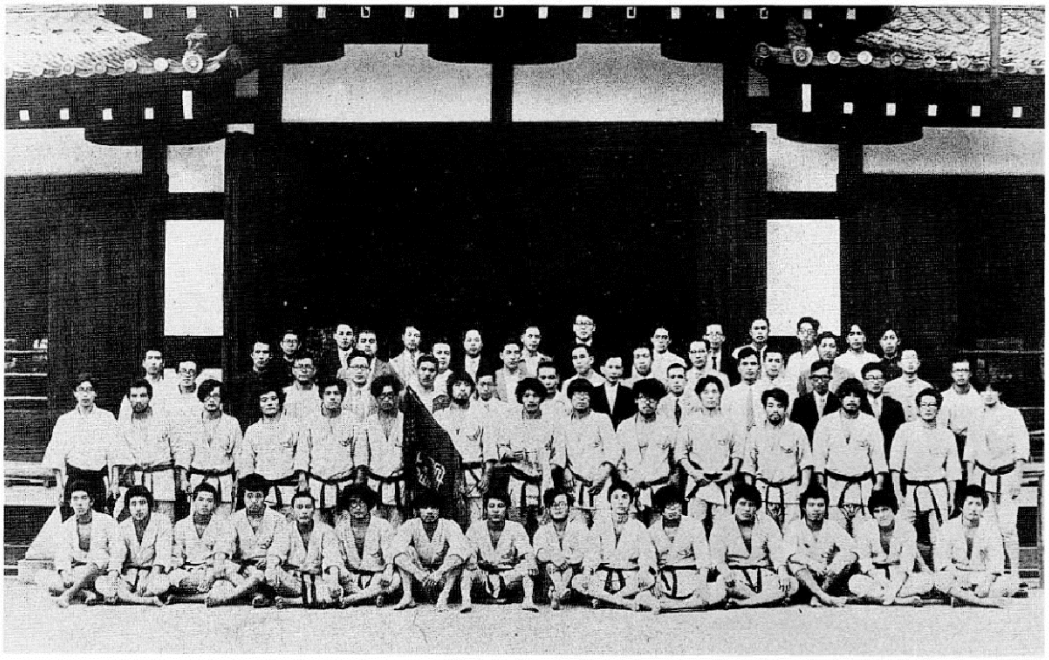
私は大学卒業後、働きながらも短期間で司法試験に合格することができた。それはひとえに大学時代、柔道部で過ごしたおかげである。4 年間にわたる柔道部活動と経済学研究を通じて私に与えてくれたものは、次の 4 つである。

体力、精神力、知力、現実への対応力

今一度「高専柔道大会と関学」の歴史を振り返れば、六高が四高を倒すのに 7 年、松山高が六高を倒すのに 8 年かかり、我が関学も昭和 4 年に高専柔道大会に出場以来、昭和 10 年の全国制覇まで 7 年の苦闘があった。初優勝の時の主将山本正三先輩は、「苦難だった優勝への道」として、「弛まざる努力、ある意味では臥薪嘗胆だった。春が来て、花が咲き、秋酣で万山紅葉するも、我に関せず、日夜黙々と練習に明け暮れた。」と残されている。さらに昭和 13 年、14 年と連覇の輝かしい歴史を築くこととなったが、戦争のため栄光の幕が閉じられてしまったことは時代の流れとはいえ、返す返すも残念でならない。

我が部は 100 年を超える歴史があり、一つの組織が 100 年以上も存続するためには、常に社会に価値があると認め続けられること、そして必死に伝統を守り続ける人間がいることが必要である。社会は我が部の何に価値があると認めてくれているのであろうか。それは、柔道の修行で習得し得る、礼節、健全な肉体と精神はもちろん、目標に対して真摯に取り組む姿勢であると思う。この姿勢は、遠きは高専時代から今日に至るまで変わりないものであり、そして、OB 諸兄が各方面で関学精神を発揮し、高い評価を得ているのである。これが我々の誇りであり、財産であり、このことが「柔道部の心」にある自尊の源である。では、だれが伝統を守っているのであろうか。それは、君達現役諸君である。かつて我々がそうであったように、自己を律し、修行に集中する、これが「柔道部の心」にある自律です。4 年間は短い。「柔道部の心」に人生を学んで下さい。

関学高商、苦難の道7回目の挑戦でついに高専大会初の全国制覇成る（私学では初）　昭和10年



西川　三木　渡辺　高岡　宮崎直　井上　白髪　岡　中塚　藤木　速水　大谷　中辻　大栗　浅井師範　常深　小西　馬淵先生　中村　山本　直原　三島　土井　後藤　中島　宮崎聖○　毛利　吉中　宇都宮　桜井　中村　藤田　内田

（「関西学院大学柔道部八十年史」より転載）
武徳殿正面にてよろこびの記念撮影

（「関西学院大学柔道部八十年史」より転載）
優勝旗を先頭に隊列を組み、部歌を高唱し宿舎に向かっているところ